日本語教育と文化の問題
——ことばの背景

斎　藤　修　一

外国語を学習するということは，ことばを学習するだけでなく，ことばの背景をなす文化をも学習することを意味します。そして表面にあらわれたことばの構造は違っても，その奥に含まれている論理は人間社会に共通なものである場合が多いようです。

このことをあいさつことばを例にして考えてみましょう。アメリカ人にむかって，こちらが英語で‘How are you?’と言えば，むこうは‘Fine, thank you’と言うでしょう。しかし，これを日本語になおして，日本人にむかって「お元気ですか」と言ったら，むこうの人はきっと「きのうまで毎日会っていたのに，なんでそんなことをきくのだろう」と思うでしょう。

また，日本語の「どちらへ?」というのを英語にして‘Where do you go?’と言えば，英米人は「大きなお世話」と思うそうです。しかし，同じことを中国人にきけば「優しい人だ」と思うそうです。

このように異文化社会の言語表現はそのまま訳しても場面とくいちがうことがあり，反対に同質文化の社会では言語の表現形式さえ似通っていることがあります。

しかし，このようなくいちがいもコミュニケーションの目的という大きな枠を考慮に入れさえすれば，必ずしもことばの形式にとらわれずに互いに通じあえます。国際コミュニケーションの問題の視点が‘bilingual’から‘bicultural’へと深められてきたのも，このような事実に着目したから

です。

国際コミュニケーションの問題を考える場合，基本的な命題として「立場が違えば呼び名も違う」ということがあります。

たとえば，イギリス人が‘the English Channel’と呼ぶ海峡をフランス人は‘la Manche’と呼びます。また，日本人が「日本海」と呼ぶ海を韓国人は「東海」と呼びます。ところが，中国語でも「東海」と呼ぶ海があり，日本ではその海を「東シナ海」と呼んでいます。

この「シナ」という呼び名は当の中国人からきらわれていますが，中国人自身が使わないかというとそうでもなく，中国発行の地図に「密支那」という地名がのっています。ただし，これはビルマの都市，ミッチーナのことです。

この「シナ」の起源はサンスクリットの「チーナスターナ」(Cīnasthāna) でインド語源です。玄奘の「大唐西域記」巻五に，

「大唐国とはどの方向にありますか」

「ここから東北数万余里にあります。印度で言うマハチーナ（摩訶至那国）がそれです。……至那とは以前の王の時の国号で，大唐というのが我が王朝の国号です」(水谷真成訳）とありますし，プトレマイオスの世界図にも‘Sinarum Regio’とあって，この呼び名が秦に由来すると考えられる根拠になっています。

「大唐西域記」はアジア文化のつながりを証明する豊富な例を含んだ書物です。たとえばインドの敬礼のしかたについて次のように記述しています。

「敬意を表すやり方には，その方法に九等ある。一は言葉をかけて慰問する。二は首を垂れて敬意を示す。三は手を高くあげてこまねく。四は合掌して平らにこまねく。五は膝を屈して行なう。六は膝を地につけてうずくまる。七は手も膝も地につけてうずくまる。八は五体をともにかがめる。九は五体を地につける」(巻二)

このような敬礼のしかたは，おそらくタイの国王などに対する敬礼法

'wai' につながるものでありましょう。

これとは系統を異にしますが，中国にも古来の敬礼法があって「周礼」に記録されています。

「拝の礼は儀礼の軽重によって九個の区分がある。第一は稽首，第二は頓首……第九は肅拝である」(尚秉和「中国社会風俗史」第二六章敬礼) 尚氏はさらにその一々を説明してこう言っています。

「第二の頓首は拝をして頭で地を叩くもので，叩首ともいう。……頓首は頭で地を一つ叩いて直ぐに起す」

これを見ればおじぎを叩頭と書くわけや，手紙の末尾につける「頓首」の意味がよくわかります。

尚氏によると「稽首はまず拝の礼を行ってから頭を暫く地につけて起すもので，最も恭敬な礼であり，天子以外には行わない」のだそうです。

このような礼が行われる場所は玉座の階段すなわち「陛」の下であったことから，「陛下」の語源がわかります。(陳舜臣「北京の旅」) そこからまた，類似の猊下・貴下・脚下・足下等も思い出されるでしょう。

玉座があったのは，皇帝の住居であり政務所である「内廷」で，それを囲んで「外朝」と呼ばれる，公式行事が行われる建物があったのだそうです。ここまで来れば「朝廷」が「外朝」と「内廷」の組合わせであることも推察がつきます。また，皇帝の政務は早朝四時ごろから行われたため「朝」という字が使われるようになったのだということです。「内廷」の「廷」は役所を意味します。

非漢字系の日本語学習者がしばしば発する「なぜ朝という字が dynasty を表すのに使われるのですか」という問に対する答がここにあります。このような問は，言語の背景をなす文化への関心の表れの一つです。

「Rashomon と羅城門は同じですか」という素朴な問も同じことで，音通から「城」を「生」と書いたのを「ショウ」と読んだのでしょうが，「羅城」とは，城市をとりかこむ (すなわち「羅」) ところの外壁を指します。

ついでながら「城」という字を「ジョウ」と読むのは音読み，「しろ」と

読むのは訓読みですが，「宮城県」などのように「キ(ギ)」と読むのはなぜでしょうか。この疑問を日本語と中国語だけで解くことはできません。

それはこの読みが百済語に由来するからなのです。李基文氏はこう言っています。

「百済語で，城を意味する語が kĭ (己，只) であったことは確実である。例　悦城県本百済悦己県，儒城県本百済奴斯只県，潔城県本百済結己郡。……古代日本語の kĭ (城，柵) はこの百済語の借用だと考えられる」(李基文「韓国語の歴史」)

こうして日本古来の文化をなすことばやことがらの起源を求めて行くと，しばしばアジア文化のさまざまな層にたどりつきます。

換言すればわれわれ日本人はアジアの人びととアイデンティティを共有しているのです。

それを証明する好例は「寺」でしょう。現代人からすると「寺」を仏教と切り離して考えることはできません。ところがふしぎなことにこの字は中国に仏教が伝来する以前からあるのです。そこで，古辞書をしらべてみますと，果たしてこの字の意味は「廷也」と定義されています。(「説文解字」)

「廷」とは前述のように役所のことです。

中国に仏教が伝えられたのは後漢の光武帝のころですが，当時，西域からの僧をとめたのが白馬寺という役所だったのです。つまり，本来は役所だったところに僧が来るようになったので僧が定住するところ，すなわち「仏寺」となったというわけです。その証拠に仏教に関係のない役所である「太僕寺」の例をあげれば十分でしょう。これは車馬牧畜をつかさどる役所です。

ところでこの字の訓である「てら」はどこから来たのでしょうか。これは諸説ありますが，「刹」という字の古代朝鮮漢字音「덜」[tjəl] に由来するという説が説得力を持っています。(金思燁「古代朝鮮語と日本語」)

日本は漢字文化圏に属しているために他の国々から「同字」であること

の恩恵をこうむっているわけですが，長い歴史のうちに漢字の用法が違ってきて，今では全く反対の印象を与えるような文字の例があります。

それは「寿」という字です。日本ではこの字はめでたい場合にしか使いませんが，中国では葬式のときにも使われます。「寿陵・寿棺・寿衣・寿鞋」などに見られるように，こういう場合の意味は「生前から作っておく」ということだったのですが，そのことを忘れている中国人は日本人の結婚式の「寿」という字を見て驚きます。反対に日本人は中国人の葬儀に参列して，お棺の上に書かれている「寿」という字を見て信じられない気持になるのです。

さて，ことばの伝播のなかだちをするものの一つに食品があります。その代表的な例は米をあらわす「うるち」でしょう。

米の原産地はインドですが，サンスクリットでは米を‘vrīhi’と言います。稲作の技術とともに，米を意味するこのことばも東へ伝えられて，南インドのタミル語では‘urushi’となり，マレー語では‘bras’となり，台湾語では‘vurrus’となり，日本に到って‘uruchi’すなわち「うるち」になったのです。(楳垣実「外来語辞典」)

一方，米は西へも伝えられて，古代ペルシャ語では‘wrjizey’となり，アラビア語では‘uruzz’となり，スペイン語では‘arroz’となり，イタリア語では‘riso’となり，古代フランス語では‘ris’となって，最後に英語の‘rice’になったのです。(W. W. Skeat ; A Concise Etymological Dictionary of English Language)

日本語の外来語としての「ライス」を考えると，原産地インドを出発した米が，一方は東回り，一方は西回りで数千年かかって地球を回り，20世紀の日本の食堂で再会したということが言えるでしょう。

米とならんで世界一周を果たした例は「茶」でしょう。「茶」の語源は苗族の‘tsua'ta’ではないかと言われていますが，伝播したことばは明らかに中国語です。その径路と音の変化は次のようにあざやかにあとづけられています。(橋本実他「熱帯農業」)

陸路(広東語系)		海路(福建語系)	
広東	cha	福建	te
北京	cha	マレー	the
朝鮮	cha	スリランカ	they
日本	(sa)	南インド	tey
モンゴル	chai	オランダ	thee
チベット	ja	イギリス	tea
ベンガル	cha	ドイツ	tee
ヒンディー	chaya	フランス	the
イラン	cha	チェコ	te
トルコ	chay	イタリー	te
ギリシャ	tsai	スペイン	te
アルバニア	cai	ハンガリー	tea
アラビア	shay	デンマーク	te
ソ連	chai	スエーデン	te
ポーランド	chai	ノルウエー	te
ポルトガル	cha	フィンランド	tee

(村井康彦「茶の文化史」)

茶の産地や種類を表す以下の名称も，もとはそれぞれ括弧の中の漢字です。

Bohea (武夷), Congou (工夫), Morning (武寧), Oolong (烏竜), Pekoe (白毫), Souchong (小種) (角山栄「茶の世界史」)

米や茶ほどでないにしても，しばしば貿易の品目となる織物の名も品物とともに伝えられます。17世紀の末に来日したケンペルは時の将軍の各地の物産を献上しましたが，その品々について，次のように記録しています。

「……これらの贈物は，中国やベンガルやその他の国の絹布類数枚，亜麻布，黒のサージ，黒のラシャ，ギンガム［訳注：棒縞または弁慶縞の綿布］，ペラングという中国や東インドの平常用いる絹布，一本のスペインの赤ブドウ酒などであった」(ケンペル「江戸参府旅行日記」)

これに対応する将軍家側の記録も残っていて，それを見ると次のようになっています。

「蘭人入貢す。貢物は金銀珠五顆……羅紗二種。……縞布四種。金巾一種……」(「徳川実紀」)

上の記述のうち「ギンガム」というのは，訳注にもあるように縞の綿布ですが，その語源はマレー語です。この語は前述の Skeat の語源辞典に次のように記載されています。

Gingham, a kind of cotton cloth . . . Malay ginggang, striped cloth.

当時の人びとがこれをどう呼んでいたかを知る手がかりが大英博物館所蔵の古文書にあって，それにはこう書かれているそうです。

「かなきん，さらさ，しまもめん」(新村出「琅玕記」)

以上のことから当時南方産の輸入品として「しまもめん」があったことがわかります。

さて，この「しま」を表す「縞」という文字を中国人や韓国人に見せると，どうしてこれが stripe を表すか，と言われます。それもそのはずで，字書にも「縞，白也」(「小爾雅」) としかありません。つまり「しま」にこの字をあてたのは誤りだったのです。その後歴史は流れて今ではその正しようもありませんが，こういうことは他の言語の歴史にもあります。その有名な例は英語の 'cherry' です。Skeat の辞書には次のように書いてあります。

Cherry (F.—L.—Gk.) M. E. cheri, a mistake for cheris, the final s being mistaken for the pl. inflection . . . L. cerasus, a cherry-tree,—GK. κέρασος, a cherry-tree . . .

つまり，'cheris' の s を複数の s だと思ってとってしまったというのです。

「縞」という字を「しま」と読ませたのは，元禄年間の字書がはじまりのようです。その一例は「倭漢三才図会」にある次の記載です。

「今凡日柳条，俗用嶋字」

「しま」を表すのに「嶋」という字を用いた例は数多くあります。

「古来より国のしれぬ物を嶋物といへり」(「古今和漢諸道見知鈔」)

「異国を嶋といふよしは，骨董にて漢品にもあらず和物にもあらぬを嶋物といへり」(山崎美成「名家略伝」)

上の例に見るように嶋物の意味は異国的ということだったようです。そして「異国的」がしばしば「異様」という悪い意味にまで拡大されたことは，次の例を見てもわかります。

「喜太夫といふもの上総の掾になりて太平記をかたる，その曲節，平家とも舞とも謡ともしれぬ嶋物なり」(「東海道名所記」)

それにもかかわらず江戸時代には縞物は大流行で，次のような人物さえ生み出すに至りました。

「元禄の頃，京都室町通三条の南に桜木勘十郎といへる人ありけり，古器物書画の鑑定をもよくせり，希有の物好にて，衣服より足袋帯に至るまで，色々の島を着用し，扇子，脇物指，柄糸，鍔，印籠，草履まで島ならずと云事なし，朝夕の食物，なますはもとより刻み物なり，煮物などにも大根ごぼうの類，すじある品をもちひ，椀折敷までも島の模様をぞものしける……家居も世に珍しく表二階の格子もさまざまの唐木にて島にくみ立，店先も堺格子と云ものを立，ここに大きなる竪貫木ありて，青貝にて唐草の模様あり，ひさしの大垂木などは細き紫竹の寒竹にて，さまざまの島に組ませける，さて中庭に泉水ありて金魚数多はなち置，そこより居間の二階へ楷梯を渡したり，その楷梯も唐もの作りの擬宝珠，高欄付てけり，かかれば世に，島の勘十郎と云けるとぞ」(山崎美成「海録」巻十三)

本日はこの「しま」の話題にちなんで，私，大勇をふるって縞のシャツを着用してまいりましたが，古い本にも

「島織物は人前へは然る可らず」(「御供古実」)とありますので，このへんで退散いたします。